

|         |  |
|---------|--|
| 氏名      | 三宅 孝昌  |
| 授与した学位  | 博士   |
| 専攻分野の名称 | 医学   |
| 学位授与番号  | 博 甲第 5875 号  |
| 学位授与の日付 | 平成31年3月25日   |
| 学位授与の要件 | 医歯薬学総合研究科 機能再生・再建科学専攻<br>(学位規則第4条第1項該当)  |
| 学位論文題目  | Predicting acetabular growth in developmental dysplasia of the hip following open reduction after walking age<br>(歩行開始後の発育性股関節形成不全(脱臼)に対して行った広範囲展開法の長期成績と予後予測) |
| 論文審査委員  | 教授 塚原宏一 教授 千田益生 准教授 難波祐三郎  |

### 学位論文内容の要旨

発育性股関節形成不全(DDH)に対する広範囲展開法(田邊法)後の寛骨臼形成不全は、しばしば治療に難渋することが多い。本研究では DDH に対する田邊法の長期成績を調査し予後因子の検討を行った。1973 年～2001 年までに DDH に対し田邊法を施行し、5 歳時に股関節造影を行い成長期終了まで追跡可能であった 73 例 85 股を対象とした。手術時年齢は平均 17 ヶ月(10-33 ヶ月)、最終調査時年齢は平均 17.7 歳(13-32 歳)であった。単変量解析で有意差を認めた因子( $p < 0.05$ )を説明変数として多重ロジスティック回帰分析を行った。5 歳時の軟骨性 acetabular index (CAI)が成績不良因子として算出され、そのオッズ比は 1.81( $p < 0.05$ )、カットオフ値は  $10^\circ$  (感度 81.2%、特異度 92%)であった。5 歳時の CAI が  $10^\circ$  以上であれば、補正手術を考慮する上で有用な因子となりうると考えられた。

### 論文審査結果の要旨

発育性股関節形成不全(DDH)に対する広範囲展開法(田邊法)後の寛骨臼形成不全は治療に難渋することがしばしばである。

本研究では、DDH に対する田邊法の長期成績が調査され予後因子が検討された。1973 年から 2001 年までに歩行開始後の DDH に対して田邊法が施行され、5 歳時に股関節造影が行われ成長期終了まで追跡が可能であった 73 例 85 股を対象であった。手術時年齢は平均 17 ヶ月(10 から 33 ヶ月)、最終調査時年齢は平均 17.7 歳(13 から 32 歳)であった。

単変量解析で有意であった因子( $p < 0.05$ )を説明変数として多重ロジスティック回帰分析が行われた。5 歳時の軟骨性 acetabular index (CAI)が成績不良因子として算出されたが、そのオッズ比は 1.81( $p < 0.05$ )、カットオフ値は  $10^\circ$  (感度 82%、特異度 92%)であった。5 歳時の CAI が  $10^\circ$  以上であれば将来の寛骨臼形成不全が予測された。

本研究では、5 歳時の CAI が  $10^\circ$  以上の場合が成績不良因子として算出された。これは DDH 症例に対しての補正手術を考慮する上で重要な知見と考えられた。本研究は価値ある業績と認められた。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。